

山形の言葉は誰のもの？

東北文教大学短期大学部 准教授 加藤 大鶴

「あの学生、軽くごしゃいでおいたんで。」言語形成期を愛知県で過ごした言語的ヨソモノの私がお世話になっている事務局の方に寄り添う気持ちで使ってみた山形方言である。「ごしゃぐ」は『庄内浜萩』(明和4年)にも「ごさひやく又ごせをやぐ」の形で現れる「由緒正しい」山形方言である。事務局に提出する書類が遅れた学生を担当教員である私が(優しく)たしなめたことの報告だった。しかし予想に反してその場の反応は、からかうような「えー！先生がごしゃぐなんて使うの！」であった。あるいは学生のうっかりを許してもらおうとした下心が見え透いてしまったのかもしれないが、どうも言語的ヨソモノの私が山形方言を使ったことに対して違和感があったようだ。

「言語は誰のものか」という言語学にとって昔なじみの問題は、例えばドーデ「最後の授業」の作品が有名だ。アイロニーをもってそこで描かれたのは、一地方のアルザス語が国家の言語たるフランス語の称揚に隠されることで、逆に「自分たちの言語」の存在が前景化したことだった。「誰かの言語」は禁じられることでその存在感を増す。日本でも明治から1970年代にわたる方言撲滅期を経て、一転、90年代から00年代にかけては地域おこしブームの勃興にあわせ、方言ブームが巻き起こった。酒田の中町には「もっけだの」というのぼりが風に揺れ、上山の商店街には「ござってえ」の看板が立つ。観光向けスポットの方言は、「自分たちの言葉」の旗印になってゆく。

しかし、「自分たちの言葉」という捉え方には、どこか息苦しい感じも伴う。「自分はこういう人なので」と規定した時にアイデンティティが表明されると同時に、他者からのコミュニケーションをどこか閉ざすような。変容と成長を自ら拒むよ

うな。「自分たち」は古来から変わらず、本質的に「自分たち」だったのか。

言語は、文化や社会の交流は言葉に刻み込まれていることを私たちに教える。私は総合文化学科の授業で山形市南部の言語調査を行い、学生とともに「南山形ことば集WEB版」(<http://www.t-bunkyo.jp/kotoba/>)をまとめた。例えば、そこには「あねはん：兄嫁のこと」という語が見える。敬称である「さん」を「はん」とするのは近畿方言の特徴で、庄内経由で山形市にやってきた可能性が高い。「しゃっぽ：帽子のこと」はフランス語 chapeau に由来するが、明治時代初期には日本で使われており、それが山形に伝わった。また、「そだす(損だす)：傷める」「やんばえ：良い塩梅」「やじゃがね：埒が開かない」など漢語を構成要素に持つ語も数多くある。漢語は大陸に由来を持つが、近畿に流入したものが日本語に浸透し改変され、それが山形にやってきた。こうした外部に縁のある言葉には枚挙にいとまがない。「自分たちの言葉」とはすなわち、文化的交流のなかで混交し続けた歴史そのものといえまいか。

であれば、言語は誰かのものであり、同時に誰のものでもありうる。それは言語が本来的に「自分ではない誰か」と交わされることを役割としているからだろう。私も懲りずに、今度は「ごしゃがねがった」報告がしたいと思う。

加藤 大鶴 (かとう・だいかく)

言語形成期を愛知県で過ごす。埼玉、山形の言語的フレーバーもある。早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。専門は日本語学。著書に『医心方字音声点・仮名音注索引』(アクセント史資料研究会)、『遠い方言、近い方言』(山形大学出版会、共著)、『みんなの日本語事典』(明治書院、共著)など。